

小野ゼミでの2年間

第6期 佐々木 美帆

「佐々木美帆さん、卒論執筆お疲れ様でした。卒業、おめでとう。」

卒論執筆も終盤に入った1月末、先生とのメールのやりとりの中でこの言葉をいただいたとき、私の小野ゼミ生活は幕を閉じました。この2年間、小野ゼミが生活の中心になっていた私にとって、ゼミ生活が終わるという実感はあまりなく、春休みが明けたらまたグル学に集まってみんなでワイワイしている気さえします。卒業するにあたって、2年間の小野ゼミ生活を振り返ってみると、A4用紙1枚では書ききれないくらいたくさんのお出来事があったな〜と改めて実感しています。

最初のクリスピーのケースで、班のみんなで色々なドーナツ屋に通い詰め、一生懸命考えた提案で1位を取ったこと。オープンゼミのためのディベート準備がうまくいかないことが悔しくてひそかにディベートメンバーの前で泣いたこと。インゼミの論文執筆が停滞し始めたとき、包丁やで思いの丈を言い合ったこと。就活中にも関わらず、事あるごとに飲みに行っはバカ騒ぎしたこと。春合宿の前夜祭と称した宅飲みで、みんなに色々助けてもらったこと。この他にも思い出深いエピソードがたくさんありますが、どのエピソードにも共通して言えるのは、「みんなで」何かをしたということです。苦しいことからすぐに逃げてしまいがちな私が、ハードな小野ゼミ生活を楽しめたのは、辛いことは分け合い、嬉しいことは共有できる仲間がいたからです。学生時代にできた友達は一生ものだと思いますが、小野ゼミでできた仲間は間違いなく一生ものです。

小野ゼミから得たものは数多くありますが、私が最も感謝していることは、「何事も目的を持って、熟考することが大切だ」ということを教えてもらったことです。個人課題にしても、グループワークにしても、また、オープンゼミやOB・OG総会を開催するときも、「何のために行うのか」「どのようにすればうまくいくのか」をよく考えなさい。」と、先輩方はおっしゃってくれました。この言葉は、私の中で、とても印象深く残っています。



韓国旅行を満喫中の著者（右端）と6期女

4月からは社会人として生きていくわけですが、これまで何事も中途半端だった私にとって、小野ゼミの活動を2年間やり遂げられたことは、今後の人生において、大きな自信になると信じています。

最後に、教授として、そして、人生の先輩として、論文のことや就活のことなど、多くのことを指導してくださった小野晃典先生には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。